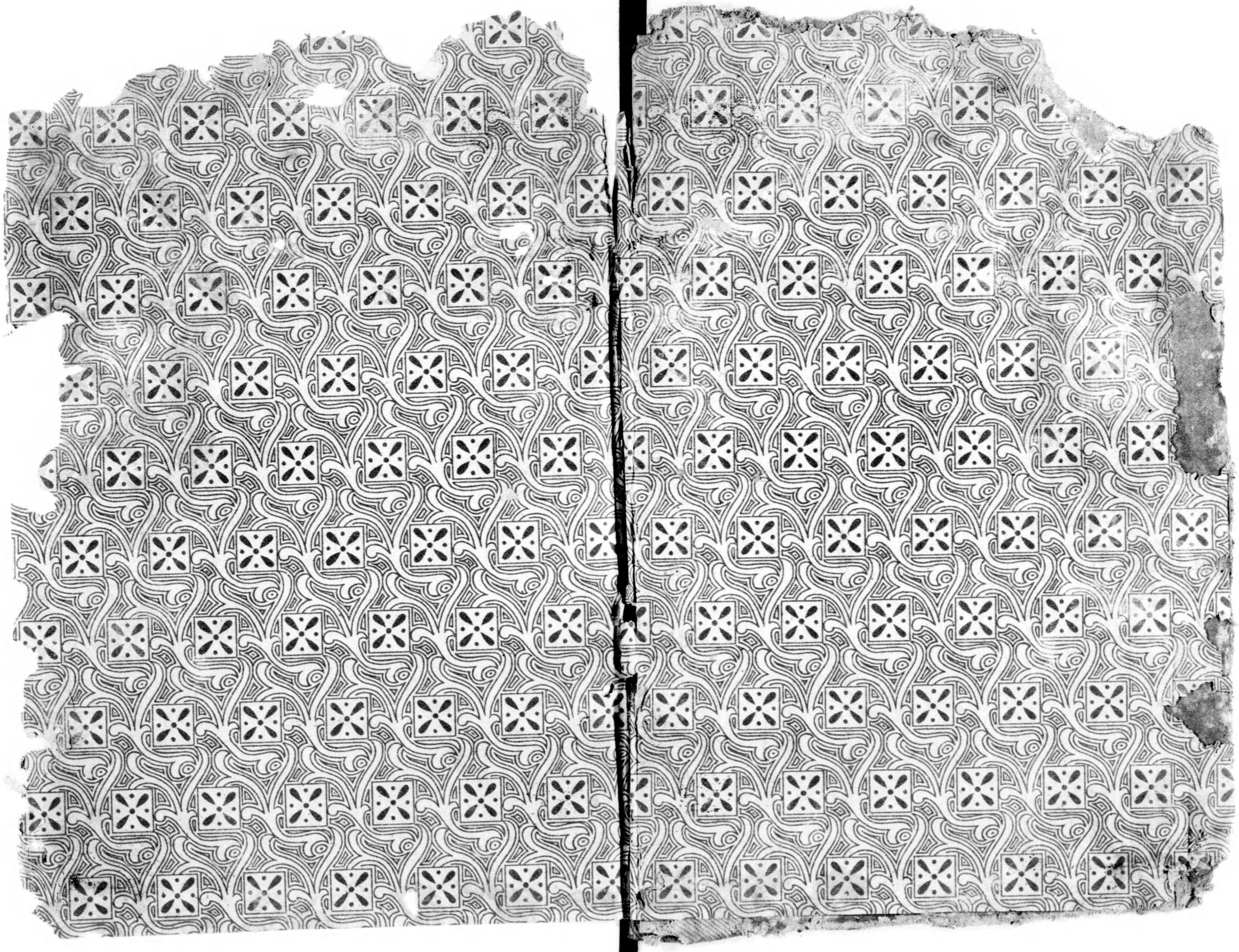
m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 19 m 70 1 2 3 4 5



特102
159

ララギ叢書第十二篇

松倉米吉歌集

行路詩社同人篇

大正
9. 7. 4
内交

大正
9 7
内交

序

松倉君の歌集の序文を書かねばならぬと思ひながらつひ筆をとらずにゐるうち、自分は、突然父の死に遭うて、家郷に歸つて來た。

昨日初七日の法要をいとなみ、今日は家の上の茶畑で、母や叔母や妹たちと茶を摘んだ。自分の長女も、珍らしがつて摘んでゐる。さうして、しきりとみんなに話しかけてゐる。茶はもう十日餘りも時過ぎて、葉

が大きくのびてしまつた。それでも全く摘まずにおくのも惜しいといふので摘みはじめたのである。弟は裏庭で薪を割つてゐる。弟はこのあひだから、ひまがあると薪を割つてゐる。

五月の空は碧く晴れて、鮮かな日光は、幾年ぶりかでこゝに相集つて居るわ一が肉親を照らしてゐる。家をめぐる樹々の若葉、見わたす村の山々の新緑は、一ぱいに光を湛へて柔かに深く輝いてゐる。が、しかし、今一二日すれば、自分も自分の長女もこゝを去つて行く。弟も軍隊に歸つて行く。叔母もその家に歸つて行かねばならない。あとに殘つて家を守るものは、母と妹と二人きりになる。自分の眼にはおのづから涙のたまるを覺える。この時、自分はまた松倉君のことを憶ひ出さずには居られなかつた。

松倉君は五歳の時その父に死なれた。それと同時に松倉君の家は破産した。松倉君は漸く尋常小學を卒へるとすぐに東京へ出た。彼の母はその數年前に、彼を

親戚の家に預けておいて出京してゐたのである。出京後の彼は鍍金工場に通つたり、金屬挽物職をしたり、働きごほしに働かねばならなかつた。書を讀むことの好きな彼は、わづかに求め得た書を、夜爲事を終へて歸つて來てから一所懸命に讀んだ。さうして彼は遂に歌の道に這入つて行つた。

松倉君が初めて自分の處へ來たのは、自分の師伊藤左千夫先生が、亡くなつて、數月後の、大正二年十月で、彼が十九歳の秋であつた。彼はその以前、土岐哀

果君たちの主張に由つて、生活と藝術との交渉といふことを考へるやうになり、本氣に歌を作る氣になつたらしい。

松倉君の歌は、かなり長いあひだ、不透明な点や、蕪雜なところがあつたが、輕く浮ついところや、いゝかげんにすまして居るやうのところはなかつた。

彼は常にみづからの實生活を核心にして、着實に專念に表現した。みづからの感じを適切に表現し切れないもどかしさを感じながら、忍耐し勉强して行つた。

彼はこれを表現する言葉の習練にも、非常に努力したが、言葉で感情を弄んだり飾つたりするやうなことはなかつた。彼はみづからの心を、その苦しい境遇のために、若しくは、賑やかな外界の影響に、わづらはされることなく、あくまでも謙抑な心を持ち續けつゝ、ひたすらに唯一つの道を見つめて歩いて行つた。眞直な一すぢの道を押し進んで行くのは苦しい。誰でもが進み得るやさしいことではない。彼の誠實と忍耐と熱心とが、この道を向上せしめたのである。彼は本當に

歌にいのちを打ち込んでゐた。生來不遇の境涯に在りながら、不治の病を身に抱きながら、反抗や皮肉の歌の殆ごないのも、彼の性格と信念とをうかがふに足りると思ふ。彼の歌の一首々々はその生活の奥所から痛々しく沁み出て來る人間性の結晶である。彼の誠實、彼の作歌は、年を追ふに從つて、だんだんと光を現はして來てゐる。ますます深く根抵の方へと這入つてゐる。しかるに彼はわづかに二十五歳を以て死んでしまつた。

松倉君の病は彼が二十一二の時分から、彼の肉體に喰ひ入つてゐた。咯血したことも一二度ではなかつたらしい。けれども、彼は病軀を押して爲事をせねばならなかつた。靜養するなどといふことは境遇が許さなかつた。彼の歌は、いたましかつた彼の境涯が、病んでゐた彼の肉體が、短かかつた彼の生命が、直接に衝迫的に發した吐息であり叫びである。彼の生涯に、歌といふ一すぢの路があつたといふことは、彼のせめてもの幸福でなければならなかつた。いのちの光をそこ

に認めつつ息づくことの出來た歌を彼は持つてゐた。

かうした深い人間性に根ざしてゐる松倉君の歌が、行路社同人の熱心な盡力で、歌集となつて、世に公にされるといふことを、自分は心から喜ばずには居られない。

松倉君は自分の安逸な感情の滿足を外に求めようとはしなかつた。たゞ彼が死ぬ半年ばかり前に、戀人のことで苦しんだ時、田舍へ行きたい、田舍に何か出來る爲事がないかしらといつて、自分に訴へに來たこと

があつた。それから最後の病床にありながら田舍へ轉地したいといふことをいくどもいつた。二度とも彼ののぞみを滿たすことは出來なかつた。松倉君が今まで生きてゐてくれたら、自分の鄕家に來てゐて貰ふと、お互に大へん都合がよいのにと思はるるのである。

茶畑のすみに、亡父がこの春接木した柿の若芽を見つけて、そのまはりの草を拔いてゐると、庭の牛がつづけざまに鳴く。見ると弟が仔牛をひいて山の方へ出

かけたのである。仔牛は弟の前にたつてゐせいよく走つて行く。親牛は自分の側を離れていつた仔牛を呼んでしきりに鳴いてゐるのである。

大正九年五月十九日、鄕里安房吉尾にて

古泉千樫

故松倉米吉

松倉米吉略年譜

明治二十八年　一歳

十二月二十五日、越後國西頸城郡糸魚川町に生る。松倉要吉の二男。母はつぎ子。父要吉は町屈指の水車業。

明治三十二年　五歳

八月四日、父要吉赤痢にて沒す。

明治三十三年　六歳

父生前に於ける思はぬ負債の爲め家産やうやく傾く。

明治三十五年　八歲

四月、糸魚川尋常小學校入學。

明治三十七年　十歲

四月十六日、兄清次郎親族會儀の上上京。以後暫く所在不明。此時より一生を通じて兄弟の溫情を缺きしものの如し。

明治三十八年　十一歲

四月、糸魚川尋常小學校卒業。後、親戚なる糸魚川町大瀨某に預けらる。

父要吉沒後、家計やうやく困難なる爲め、母つぎ子は遂

いに家財全部を賣却の上、横濱なる親戚某の許に至る。後上京して日毛某に再嫁す。

明治三十九年　十二歲

四月、高等小學校へ入學。大瀨某の許より通學す。

明治四十年　十三歲

三月三十一日、高等小學校を退學す。後、母を追ひて上京。本所區北二葉町日毛某宅に寄寓す。日毛某は當時東京毎日電報社社員たり。母つぎ子は裁縫を教授す。此頃一月餘りメリヤス業へ奉公に行く。

明治四十一年　十四歲

二月、本所區南二葉町金屬鍍金マルエム工場へ通勤す。成績優良にて屢賞與を受く。

明治四十四年　十七歳

三月、同工場内に於いて戸塚恒司、前橋喜久男と相識る。六月、小間物行商人たらむ事を志望し、たまたま恒司、喜久男等の意見をうかゞふ。當時恒司に、文學、和歌、をすすめらる。七月、恒司、喜久男、と共に廻覽雜誌「青年文壇」を發刊す。それより毎月に及ぶ。これそもそも「行路詩社」の前身たりき。

明治四十五年大正元年　十八歳

四月、廻覽雜誌「青年文壇」を「茫星」と改稱。會員七八名、文藝及び短歌を載す。喜久男、恒司、と共に短歌、俳句、長詩、短文などを雜誌に投書す。

大正二年　十九歳

五月、早川幾忠「茫星」に加はる。六月、「茫星」を「カヲタレ」と改稱主として短歌を載す。原稿の取まとめは幾忠が爲し後恒司に移る。十月、喜久男と共に「アララギ」へ入會、古泉千樫氏の門に入る。

大正三年　二十歳

九月、喜久男肺病にて郷里越中へ歸省す。以來音信なし。

大正四年　二十一歳

三月、廻覽雜誌「カツタレ」を「蹟」と改稱し、印刷に附す。發行所を米吉宅に印刷所を幾忠（この頃より雛彦の名を用う）宅に置き、活字、洋紙など買ひ來たりて、幾忠、恒司、と共に自から印刷職工たり。四月相坂一郎高田浪吉「蹟」に加はる。八月、「蹟」を「行路」と改稱。十一月、印刷費不充分の爲め廢刊す。

大正五年　二十二歳

五月、肺尖を病む。爲めにマルエム工場を休みて床に就く。七月徵兵檢査を受く。不合格。吐血數度に及びしが

十月頃より病やうやく退く。十一月、再び廻覽雜誌「行路の研究」を高田、相坂、戸塚、早川等と共に發行。相坂精二加はる。

大正六年　二十三歳

二月、廻覽雜誌「行路の研究」を「萬葉研究」と改稱し萬葉集の歌を研究す。四月、恒司、浪吉、一郎、米吉、幾忠ら五名の歌を集め「無名歌抄」として印刷發行す。五月、築地西洋洗濯業某へ奉公す。七月、之を止めて幾忠宅に寄食し、後、幾忠の兄の世話にて金屬挽物職木村某に奉公す。この頃より母つぎ子病みて床に臥す。十二月十六

日母つぎ子遂いに沒す。以來木村某を辭し、挽物職人となりて同業竹內某へ通勤す。

大正七年　二十四歳

二月、家を出でゝ本所區長岡町東郷理髮店の二階へ寄居。竹內某へ通勤す。廣野三郎、中村美穗「行路詩社」へ加はる。

大正八年　二十五歳

二月、この月廣瀨照太郎行路詩社に加はる。竹內某より林某へ轉ず。養子分となりて働く。四月頃より愛人を得。五月林某より去る。八月、田邊駿一氏の紹介にて同業時

園某へ轉じ同家に寄居す。物質上の基礎を愛人と共に作らむことを企圖す。九月十日咯血。十一日山本信一氏の診察を受く。肺病と確定さる。其夜より再び東郷理髮店二階に臥床、病中物質上のことは專ら涙吉らによつて支へらる。十月一日築地東京市施療病院へ入院すべく願書を出し診察を受く。此暫く後本所濟世會へ通ふ。十一月十二日施療病院へ入院。熱三十九度を下らず。十一月廿五日午後二時半死去。廿六日朝屍室にて告別の上入棺、砂村火葬場にて茶毘に附し、二十七日、本所長岡町東郷理髮店二階にて通夜。二十八日淺草北淸島町報恩寺內西光寺に葬る。戒名「證誠信士」

松倉米吉歌集目次

大正八年

簷雨（八首）……一
病みて（三十六首）……四
冬ぐもり（二首）……一六
油蟬（十八首）……一七
親なし兒（二首）……二三
朝床（八首）……二四

わかれ(七首)……二七
雨ぐもり(一首)……二九
ひとり(十七首)……三〇
霙(八首)……三六
冬の街(八首)……三九
一月(五首)……四一
郊外(二首)……四四
藥賣(一首)……四四

大正七年

冬の日(十二首)……四五

靜けき夜(二首)……四九
春の街(十七首)……五〇
母は死にたまふ(十七首)……五六
悔い(一首)……六一
秋の夜(三首)……六二

大正六年

秋たつ頃(四首)……六三
夕空(一首)……六四
塲末(五首)……六五
まひる(十首)……六七

夜仕事(五首)……七一
夕暮(十七首)……七三
朝(七首)……七九
ある夜(一首)……八一
冬の街(九首)……八二
父(二首)……八五
凍雪(四首)……八六
兄の結婚を祝す(一首)……八七
山茶花(五首)……八八
一郎を鑛山へ送る(三首)……九〇

大正五年

秋晴(五首)……九一
砂塵(十首)……追補
赤(一首)……追補
夕飯(三首)……九三
夏のころ(二首)……九四
病中吟(五首)……九五
雑詠(九首)……九七
飴賣(二首)……一〇〇
夜の雨(六首)……一〇一

長家から…其一…(二首)……一〇三
朝飯(四首)……一〇四
長家から…其二…(一首)……一〇五
日だまり(六首)……一〇六
長家から…其三…(二首)……一〇八

大正四年

嵐のあと(六首)……一〇九
米吉の書簡(一篇)……一一一
夜(四首)……一一三
舞子(四首)……一一五

朝顔(六首)……一一六
米吉の書簡(一篇)……一一八
青芝(八首)……一二〇
貧窮餘錄(六首)……一二二
米吉の書簡(一篇)……一二五

大正三年

乏しき仕事(七首)……一二七
林登美子氏へ(四首)……一二九
眞鍮粉(六首)……一三一
深案(二首)……一三四

槌の柄(七首)……一三四
機械の音(五首)……一三七
一年(五首)……一三九
歌會の歌(十首)……一四一
米吉の書簡(一篇)……一四四

大正八年

簷雨

この日ごろ窓ひらかねば光欲しほそくながる
る夕日のよわさ

病みて居て晝も夜もなき床にゐつ北風つよく
戸の破れを吹く

窓の戸をひらかで幾日すぎにけんすき間吹く
風今朝いと寒き

救世軍の集りの唱歌も今宵寂しひそ〳〵と降
る秋雨の音

一つ打ちては休みゐつつかれがれの唾(つばき)手にひ
り槌打つ父はも

ひそ〳〵と戸の面には雨降るけはひ妻は乳ふ
さよもぬらすまじ

浪吉は吾の體を警察にすがらんと行きぬなぜ
に自ら命を絶ちえぬ

膝も腹もひつしとかためぬ寝巻の裾にまくるま
りつゝ悪寒を忍ぶ（十一月作）

病みて

ゆくゆくの思ひは暗しわく涙くひしむれども
流れて出づる

すゞかけの廣葉ひろはの雨にぬるる見て居る
眼になみだながるる 電車にて

これの身のやまひあかすをまごひてか煙草の
火見つゝいましゝ君はも 山本氏の診察を受く

久々を宿にもどれば落かべや埃(ほこり)にあれて足ふ
みかぬる

雨方の窓を開けば雨げふき部屋のしとりはい
やましにけり

久々に吾の寢床をのべにけりところ〴〵にかびの生へたる

かび臭き夜具にながく〳〵こやりけりこのまゝにしていつの日癒えん

灯をともすマッチたづねていやせかるる口に血しほは滿ちてせかるる

血を咯きてのちのさびしさ外の面にはしとしとして雨の音すも

宿の者醒めはせずかと秘むれども喉にせき來る血しほのつらなり

菓子入にと求めて置きし瀨戸の壺になかばばかりまで吾が血たまれる

かなしもよともに死なめと言ひてよる妹にか
そかに白粉にほふ

命かぎるやまひをもちてさびしもよ妹にかそ
かに添寢をしつつ

歸しなば又逢ふことのやすくあらじ紅き夜空
を見つゝ時ふる

嵐の中の人のさけびに目醒めけり夜ごとに血
を咯く時刻の來れる

かうかうと眞夜を吹きぬく嵐の中血を咯くき
ざしに心は苦しむ

嵐なぎて明け近からし廣き街一面におこる蟲
のなき聲

所々に鳴る祭の太鼓とう〳〵とこやりて居れる腹にひゞくも

入りみだれもみあふ神輿のゆゝしさを二階の窓にもたれて眺むる

すこやけき人のさわぎはともしかも神輿(みこし)ひしめき動きて行ける

すこやけき人は大路にみちにけり祭のにぎはひ見てゐるさびしさ

秋げ寒き雨せう〳〵と窓にふり神輿のどよみ遠のき行ける

彼岸に入りて二日目の今朝のひえ〴〵と冷たき風の蚊帳にはらめる

ふたたびは暑さにかへらぬ風らしもうすき布
團に身をおしつつむ

待ちてゐる思ひはすべな街すぢの活動寫眞館
に灯はともりけり

雨ごとに秋ふかむらししとしとと窓ふりとざ
す雨のけながさ

棟裏の煤北風にいやゆらぐいよ〳〵秋もさだ
まりにしか

窓とざしひとりにつらき夜となりぬ枕にちか
き秋雨の音

じつとりと盗汗(ねあせ)にぬれてさめにけり曇りひと
日ははや暮れかゝる

待ちつかれ眠りたりしがうらさびし今まで來
ねばなどか今日來ん

曇り日は暮るるにはやし棟裏の煤のゆらぎも
見えなくなれる

秋のけのふかまるにつれ一日々々吾のからだ
のおとろふらしも

かけ布團に羽織かけそへくるまりて今朝の寒
さのすぐるを待つも

窓の戸の少しのひまゆ吹く風は布團とほして
しのぶにつらき

今朝も雨に窓はひらけず衰への日毎にしるき
わがからだかも

朝飯を今朝は思ふさへ頭重しかくはなりつゝ
病ひ重るか（九月作）

冬ぐもり

はる〳〵に水田白けて冬ぐもる空のいづこか
鳴きごもる牛

どろ水のぬくもり見えて冬ぐもりここの水鳥
鳴かむともせず（大正四年二月作）

油蟬

如何なる仕事ださるゝも知れずろくろの調子
見てゐるうちにはや汗ながるる

この家に來て初のたよりは妹より來し畫の休
みにゆるりと讀まな

爲事やゝ手には馴れたりまんま晝街のごこか
に油蟬なく

親方が兒にあたる聲のあらあらし爲事の出來
のはえぬ切なさ

妹がちかひかたかりし故それは案ぜずゆめ爲
事には心ゆるさじ

雨氣ふかき今朝の寒さにめざめけり肌さぶし
もよ久しく逢はねば

便りたえてあまりに久し柿の青葉にそよ渡る
風の今朝いたく寒き

とりこしのねたみにあらん昨日より續くあは
れのやりどころなさ

このまゝに便りはたゆともゆめ妹はあきらめがたき心なりけり

やるせなくろくろ塲には立て爲事着の汗づきて匂ふ今朝はすぱゆき

ひがみ心さびしくなりて仰ぎみれば桐の垂實のうるほひのなさ

滿たぬ思ひに別れて來にけりひつそりと祭の夜も更けわたりたる

軒提灯のあらまし消にてならびたる夏の祭のをはりのひそけさ

うらみ言いひて別れて來たりけり辻の神樂もはてゝしまへる

起き殘る家あるけはひむし暑き祭も更けて床に入りけり

人はみな情にあつし轉々と渡りし家々くりおもひつゝ

かうむりしなさけは多し今年もはや秋風吹くにいつかむくい得む

朝雨にうす陽ながらふひそけさをさめつゝ友のなさけおもほゆ（十月作）

親なし兒

親にわかれしまゝ四つになりし悲し子ぞ我が怒れる下べにもだすは

弟のごといつくしまんとぞ思ふかもつぶらまなこに我を見る子を（大正四年二月作）

朝床

今朝もかも諸所の汽笛にやうやくさむれすべ
なき事を夢に見てゐし

朝めざめ口の苦唾家根にはきふたゝびは臥す
布團かい抱き

床をたゝむ心のとぼし便りたゐてすぎし幾日
を指折り見つつ

ひし抱きいねんとおもひまちまけしその夜も
むなしいまにさびしき

今は心もかれしと思ひこもごもののぞみもた
ゆく朝床に居り

かけもちし常の思ひの今朝は消ねてひそひそ
くだる宿の梯子を

遺瀬なき夜々のおもひや裸寢の床のしとりを
じつとさすり居り

今日は明日はと待ちのたよりのいくそ日をう
つゝなくへしなほもつゞくか（九月作）

わかれ

下駄をはきつつ居れりとは知れど人目しげし
顔さへ見ずに離るゝ切なさ

今こそはせひなき別れ夕暗く鎖の手元は定ま
りかぬる

鞴(ふいご)ふきつつ火元をば見て吾が居れど消ねし足
音に思ひはつきぬ

おししのび涙のみこみひたぶるに鞴ふきつゝ
堪へがてぬかも

立ち居つゝ時のすぐるはいや早し心はさらに
爲事になじまぬ

思ひあぐみ出て來りけりむきむきに人はいそ
げる街の中なる

人に語りてなごむうれひにあらぬかもうなじ
に暑き陽はかたむける（九月作）

雨ぐもり

たよりなき一本道で雨にあひ大學生に逢ひに
けるかも（大正四年二月作）

ひとり

ことはに此の家の父は父にあらず心さびしく年ほぎに來し

門松の細きが二本立てりけり今年は父が手にて飾りけむ

亡き母はまさに世になし土間に立ちよそ人じみし年始を言ふも

身の程のつつしみ深きこの頃をこの父は知らじものを得いはぬ

今はかも母は世になし父のへに坐れる女を呼ぶにたへめや

齡五十をすぎしと思ふ白粉に面を包めど地肌
のくろき

しわ深き此の人の手に白粉匂ふ吾れにくれん
と餅を燒く手に

常日頃したひし家と思はれず言もいはぬ父
とかなしさ

紙ばりの母の位牌は佛壇の隅によせてあり一
年見ざりし

床づきて久しかりける床のあと疊の面にまさ
に殘れる

施療院に行く心とはなりし親方の下駄の埃を
吾はうちはらふ

小路の内いと静かなり親方と肩ならべ行く春の陽あつし

春の陽のかゞよふ街を肩ならべ貧しきわれら病院にゆく

芽をひらく街樹の明るさ親方は歩きおくれてはるかに來れる

そりたての鬚あとしるし歩き來る親方の面のいややつれたり

親方の立居あやぶみ滿員の電車いく臺やりすごしける

土ぼこりかすかなるかも電車道すれすれに舞ふ黄色き胡蝶（六月作）

霙

吾宿の煨(おき)のけもなき二階思ひ戻りていゆく街
はみぞれつつ

一包の炭を求めて宵ぐちの忙しき街を宿へ行
くなり

吾宿の棟木から下げて灯すランプ今宵なみな
みと石油さしにけり　五首母の一週忌

赤々と火をとり上げて坐りけり來るべき友の
いまだに見ねず

言葉あらげて吾が立ちたれば落ちくぼむ眼ほ
そめて母居たまひし

あが手にてぬぐへど母が落ちくぼむまなこに
泪またわき出でし

ほとほとゝ雪ふりつもるこの夜早く妻と寝て
居む心ゆたかに　廣野牛麿結婚す

新妻が手に洗ひけむ牛麿の胸に今日見るま白
きシャツは　（三月作）

冬の街

宿のものまだ醒めぬらし仕事始めに心すなほ
に吾は出て行かな

門笹に音たてゝ渡る朝の霜風仕事始めに吾は
いそぐなる

宿の主人に譯をあかしてうつり着の質の入替
たのむなりけり

質を出せし袷手に置き獨居つゝ逝きにし母に
思ひの多き

しげしげと醫師に此の顔見するられつゝわが
貧しさを明しけるかも

價(あたひ)安く藥もらひて外に出たり裸にならぶ街の
木立は

藥さげて冬さり街をまだ馴れぬ親方先にまた
もどりゆく

師にも友にも逢はで久しやいつまでも心をま
げてすごさるゝべき（二月作）

一月

逢はむとぞいらつ心はさびしかも足ふみにじりためらひてゐる

たれに忍ぶ我にもあらず今宵の廊(くるわ)をゆくさきもちてひとり歩くも

小夜更けとふけて梅雨けの暗き曇りとぼとぼとしてさめつゝ戻る

母をもたぬかたみになれて肩つきあはせ酒場を出づれば雨しぶきをり

酔ひどれの友とほそ〳〵ふる雨に心から肩くみ合はせあるく（一月作）

效外

母その母と爭へど效外に陽はふればこそいまは忘れめ

玉きはる愁抱けば枯草にのこんの雪はまんぢりとして（大正四年三月作）

藥賣

みづからの髯を剃らめと灯をともし剃らねばうれぬ髯そり藥（大正四年六月作）

大正七年

冬の日

雨の日の得意まはりのたよりなき吾を見てゆく同業者あり

新らしく得意を意たる身もかるく銀座の夕べをいそいで歸る

軒やれを流るゝ冬の日の光り細き命をまもる
はかなさ

今日も休みて母を守れどおぼつかな今宵食す
米如何して買はむ

ひと抱への本賣りに來し師走路は並樹も枯れ
て明るくありける

米のことわづらひつきて目の色も衰へにける
母につげつる

病む母のひとり家居はつらからむ雪のもよひ
の心もとなや

簾懸(すだかけ)の殘葉とぼしくちし葉のをりをり落つる
街のさびしさ

冬がるる篠懸の木の立ちさびし汗は流れて母
にゆくなり

入りくぼむ吾家に日ざし同しくて母は靜かに
奥にねむれる

冬ふかき曇りの中のおどろなる心をこらへて
轆轤(ろくろ)をふむも

瓦斯の灯のほてりしたしき此の夜頃母の目の
色衰へにける（八月作）

靜けき夜

雨多き深山と聞けば思はるゝ夏雨は身にこた
ふるものを

大寺の裏の靜かに五つ六つ柘榴の花は落ちて
ゐるなる（大正七年七月作）

春の街

朝縁を素足にてふむこゝろよき此の春は來つ
思ひ足らはず

庭の土うるほひにけりめぐり來し春待ちかね
て母は逝きしも

使を持ちてたまさか歩く春の街滿員の電車埃
まきてゆく

ひさびさに街を歩きてひとり心に悔い多き春
となりにけるかも

ゆくゆくを思ひ定めむことのしげき歩き疲れ
て獨心に

廣き街の夜はしづかになりまさり醉ひて吾が
ふむ足音のさびしさ

惡酒に醉ひ更かしては戻り來つこの夜もひそ
かに宿の戸たゝく

久々に晝間戻れば吾宿に母の寫眞はちりにま
みれをり

見ゆる程の春のほこりは街を行く人の足ごと
に靜かにまひ立つ

額の汗ぬぐひて居れば此の小路に砂塵まひ立
ち春めき來たれる

南ふくたゆき目醒めに小雨ふり向つ家の屋根
はだらにぬるる

南風雨もつ空となりにけり病もつ身は心くるしも

降りしぶく春の小雨に街並の篠懸の木肌しつとりぬるゝ

向き並ぶ長家が小路の友が家に幾夜を寢けむ此の夜も戻り來つ

疲れては戻りて來つるふかき夜の水溜ほのに小路に光れる

友が家のざこ寢の眠りいやふかし獨りひそかに吾床をのぶる

友の家に心沈めて寢て居れど戸の破れ多く北風さむけき（五月作）

母は死にたまふ

今は言かよはぬか母よこの月の給料(かね)は得て來
て吾は持てるを

獨子のひとりの母よ薦(こも)に寢て今はかそかなる
息もあらぬか

痛しとも言はぬ母故今はさびし骨あらはなる
むくろ拭ひつゝ

見送りの人影さむくかたまりて明時(あかとき)しらす鷄(かけ)
は鳴き居り

霜凍てし街の面は明るめり母の柩はゆらぎつ
つゆく

獨子の吾はさびしも身を近く柩にそひて歩き
て行かむ

あかときの街に足音のせはしきはいとひそや
かに母を送るなり

一すぢに燒場へ通ふ細道の夜は明けにけり田
道となりて

手車に母の柩は乘りにけり朝日かすかに流れ
てきたる

まはだかに母の柩はあらはれて朝風さむく吹
きすぎにけり

隱坊に押され押されて奥ふかく石の竈に母は
入りにけり

母を入れてひつたりとざす鐵の扉の音をさびしく出でゝ來にけり

母のなき初夜の寒さしみじみと火をうちかこみさびしみにけり

寂しくて夜毎わが名を呼びにける母も今宵は燒けて居りなむ

ところところと今宵燒けなむ母はかなしなにをたのみに此の後を行かむ

鐵の扉をあけてさびしもふたかけの骨まろび居りつめたくなりて（二月作）

悔い

岩つゝぢ花の明るき五月空またかるがるとものを言ひける（大正四年六月作）

秋の夜

やゝ蜂が巣をくふほどの家なれば晝の靜けさをやうやく思ふ

冷えびえと秋の夜をとほしひとり居る母を思ひて行きがたきかも

疲れ來し父つく〴〵と酒を飲むそれにふれつつ母はかなしも（大正四年十月作）

大正六年

秋たつ頃

仕事におそく此の夜も行き得ず病む母は父と
そがひにさびしく寝て居む

ぬかるみを掃かで幾日か雨に經しつく息白き
今朝とは成れる

雨を持つ夕風さむくくもり空あかく明るくやけてありけり

たそがれの街のごよみにおのづからうなじは垂れて歩きて居れる（十一月作）

夕空

暮れがてぬ夕空さびしきはみ行く母の心のはかり知られぬ（大正七年八月作）

塲末

雜草のまばらに青き塲末の原横切りゆけば朝の寒しも

親方の仕事のはたにうづくまり蚊遣いぶして吾が居りにける

桃の湯に浮ぶ桃の葉をちぎりつゝ今宵の疲れを忘れて居るも

又しても道具をいためこの度はひとりもだして見て居れるなり

殘り居てひとり道具をかたづける窓邊あかるく夕やけにけり（十月作）

まひる

主家を逃げ出でひもじき腹を抱きつゝつげて行くべき家もなしに

此の街も晝時すぎてむ額近くかゞやく街土のいきれ立つかも

炎天の街にしなえし繁り葉の桐の廣葉の下蔭
とぼし

今日の身のひもじさこらへ忘られず圖書館に
居て汗ぬぐふかも

貧し家に歸り來りて眞裸のざこ寢の中に身を
ひそめ寢る

圖書館のかんかんと晝の明るさに人々は皆腹
たらひて居けむ

食堂の午後の靜けさ定價表ひそかに見つゝす
ぎにたりけり

傾きてなほ照る陽あし空(むな)しさに街をさまよふ
身につらきかも

築山のしげみの裏に身をひそめぼろぼろのパン食べにけるかも

貧し家のざこ寢の中にはらからのなさけ嬉しく落付きにけり

眠ねを足らぬ獨心にしつとりとさ霧に濡るゝ夾竹桃の花

夜仕事

此の職にたけて歸る日いつならん夕べさびしく汗の冷えつる

夜爲事のしまひ早めて錢湯に行く道すずし夏の夜の月

夜仕事を終へて出て來し新開の月夜の街に鳴く蛙かも

細々と雨になりける朝の目醒め母に歸らで幾日堪へ得む

親方のまはすろくろの錐の音雨空近き露路になれるかも（九月作）

夕暮

夕暮をおのづから煙る砂埃身にあびながら橋を下るも

夕さりて廣場の驛に灯は點り堤の汽車は街に入りにけり

煙に暗き夕べせんなく赤土のやはらぐ廣場よ
こぎりゆくも

父を待つ宵のもだしの深まりて戸を吹き鳴ら
す風いでにけり

疾風の夕べ西空澄み透り太ぶとと煙突は黒く
聳ゆる

久々の小雨に街の篠懸は木肌青みてぬれにけ
るかも

篠懸の枝はかられて春近き小雨の中に雫なが
るる

篠懸の幹の片かは乾きをり小雨のしぶく街は
さびしも

願ふは金のこと春の晝さがり油にしみし友に
逢ひゐて

洗場はまだ明け切れず朝の水しみじみと身に
冷えてくるかも

築地川をモウタアボウトの馳るらし此の初夏
の夕暮さむし

うなじ垂れ行けば四辻の赤躑躅(あかつつじ)まひるの埃か
むりて咲ける

夕やくる築地の川の輕子橋を印半纏着て渡り
ゆく

身にそはぬ印半纏苦にしつゝ青葉垣根のもと
を吾がゆく

着古るしの下着集めて夕映の京橋のほとりとぼとぼとゆく

夕風に街樹の若葉ゆらぐかげあつめたる古着かゝへて歸る

腰骨の痛みやすむるいとまもなし井戸の深くに晝の陽光る（大正六年四月作）

朝

厨べにすてし茶がらは凍りつき雀は降りて餌を探すかも

働きに父は行きにけり露路の霜消えてほのぼのゆげ立ちのぼる

晝近くなりてもいまだたづきなく足袋は埃に
まみれたりけり

曇り深き街の往來(ゆきき)の影さむく雪のきざしの夜
は更けにけり

背戸の空地の疾風の音におしだまり母と二人
居りさ夜ふけにつゝ

軒の灯の光りひそかに雨氣だち夜更けて渡る
風冷えにけり

初夏の日の中の街の明るさにこれの身一つ行
きがたきかも（六月作）

ある夜

宵の灯の流れ明るき街中を疲れしぼみて歸る
なりけり（大正四年四月作）

冬の街

午さがりうす陽ながるゝ冬の街蛇屋の前に人たかり居り

おだやかに朝日ながるゝ川岸の倉庫のかげに荷馬やすめり

濠の邊を吾はいそげり日に光る濠の氷はとくるにあらむ

目に近く光るは濠の薄氷かれ芝ふみていそぎ行くなり

冬の日の傾きかゝる街なかにつくづく歩き疲れたりけり　職を求めに出て二首

ほとほとゝ疲れて歩く身に沁みて足の霜朽(しもやけ)こ
そばゆきかも

いつさんに空地よぎりておぼつかな母を離(か)る
身のこの呼吸(いき)あへぐ　貧しさに家出を思ひて三首

河岸に豚は居ならび入日さしその鳴くころはは
殊に寂しも

灯ともす街飯煮ゆる匂ひうまければ涙ながれ
て母に歸るも　(三月作)

父

老の身を堪へつゝ歩く父憶ひなほ畫床に落ち
つきがたし

疲れて歸る父故に畫床示すにしのびず息苦し
みつ夕歩きする　(大正四年十一月作)

凍雪

夜ふかく仕事に冷えて火にかざす母上がもろ
手の輝のかなしさ

くだちゆく夜しみじみと母上が赤ぎれに塗る
藥は匂ふ

街かげの空地に殘るはだら雪凍れるまゝに日
は暮れにけり

明けらしき月の光りに凍りたる空地の雪はふ
む人もなし（二月作）

兄の結婚を祝す

みおもひの足る日來にけり母上に告げまいら
せん思ひこそわけ

山茶花

夕やけのつめたく明き街中にほのかに白き山茶花のはな

街かげの濠うづむると高々と赤土つみて汽車來りけり

潰す濠の水は泡だち濁りだち深き曇りを片よせにけり

朝の街に爪先寒むみ吾が立てば白き鷄一羽近より遊ぶ

曇り明るき初冬の街に白き花さむく匂へり山茶花のはな（一月作）

一郎を鑛山へ送る

喉ぶとの汽笛高鳴る本所を忘れたまふな雲がくるとも

鑛山にゆき喉痛めなば母上も心し泣かむ叫びたまふな

山道に堪えられなくて糞しらば尻濡ちすらむ草の朝露（大正六年六月作）

大正五年

秋晴

宵街の灯のなかにうなじ垂れ心ばかりは焦ちてけるも

街の灯の乏しきところ人目にも今は觸れねばしみ〴〵と冷ゆ

公園の芝草原に風たゝず夕陽黄ろく流れてありけり

秋晴るゝ芝生の中を足袋ぬぎて女ばかりも遊び居るかな

夕街の裏の空地の静けさに雀きたりて久しく遊べり（十二月作）

砂塵

職を持たぬこの身さびしくきさらぎの裸木ならぶ街を來にけり

まき立ち來る砂塵の中に職の無き身を悲しみて佇みにけり

金を得て母に行く行く早稲田通りこらへられ
ずて又書店に入る

椎の木の繁葉の下の曇り深く疲れたれども歩
むなりけり

屋敷街の深き青葉のまがなしさ洗濯仕上げて
置きに來にけり

なみ〳〵と夕潮みちて居りにけり車ひき來し
呼吸の切なさ

身の疲れとけぬ夜頃のさびしさを雨にふられ
て告げに來しかも

堪へ得ずと行かば嘆かん母上を心に持ちて釣
瓶をにぎる

軒下の深き堀井の黒まりて夕さり來る風のさびしさ

仕事なきこの家に替へてもだ久しひそかにぬるゝ冷汗をぬぐふ（大正八年作）

赤

すべなさや壺にみつ血のこぼるるになほも血潮ののどにせきくる（大正八年九月作子規忌歌會詠草）

夕飯

夕飯の後にながるゝ汗ぬぐひ健けき日の近づくうれしも

おそ秋のふかき曇りの濠の邊にこの濠つぶす人は動ける

濠底にやうやく殘る水の香の古きに魚はむれて潜めり（十一月作）

夏のころ

貧しくも石燈籠に灯をともし親子三人の夕なるかも

たまゆらは石燈籠にことよせて親子の心明るかりける（大正四年七月作）

病中吟

裏街の朝のたけゆく軒かげに羅宇屋はひとり火をおこしをり

椎の葉かげ靜かに風は流れきて洗濯の音いまは久しも

日毎ひねもす家居はすれど椎の葉に日はかゞ
やけど蟬も來鳴かず

雨上りその夜も更けて米を磨ぐ母に涼しき風
吹きにけり

神田川朝潮みちて男らが大き角木をひきあぐ
るかも（九月作）

雜　詠

夜仕事をひとり休みて出でにけり夕べの街は
いまだ明るし

工場の夕食ののちのさびしきに辨當箱の錆お
としつつ

晝休みになればおのづと火を圍めどいまだ親
しまぬ吾等なりけり

火消壺に移す炭火の匂ひ滲み工場の夜はふけ
にけるかも

糖雨にけぶる夕べのぬかるみを勵む心の出だ
しかねつつ

朝床に吾体の疲れいたはりて安くもあらぬ片
時なりけり

眞夜中を動く雨雲ほのかに見え小黑き街を風
はながるゝ

暮れはてぬ庭に靜かに雨けむり母は貧しさを
おほふなりけり

大川の宵の滿潮闇ふかく波ふくよかにほの光りくも（八月作）

飴賣

老いの身を飴賣りとしてぼんのくぼにお多福の面をまづはくくりぬ

飴を賣るおやぢの頭の多福面まことに朝を笑つてゐるも

夜の雨

久々の小雨に街は更けにけり懈きからだを濡れつゝ歸る

小雨降り街の夜更けて鐵をうつ響は遠くながれて來る

暗き夜の小雨に濡るゝ椎の葉のかそけき音を
聞きにけるかも

夜おそく冷たき辨當はみ居つゝかよわき母を
思ふに堪へず

機械場の機械も止みて夜は深し明り取より月
ながれたり

犬の子をみんな掌に入れて軒あひの細き日だ
まりへぬくもりにゆく（四月作）

長家から（其一）

强欲な家主の庭ぞ吾が國の櫻の花のこゝちり
ごころ

一面のむね割長家に朝陽降り老工女の兒は泣
きを沈めり（大正四年四月作）

朝飯

しらしらとかそかに東いろめきて今し朝飯に
ぬくみけるかも

山茶花の垣べをゆきて朝早く辨當のぬくみほ
の感じつゝ

朝々を落付かず見て過ぎにけり紅き山茶花の
散りつきんとす

冬の陽は工場の窓にあたゝかし懶くる心みぢ
んあらなく（二月作）

長やから（其二）

老工女は稼ぎにゆきぬやがて兒の茶碗を鳴ら
す音ぞゆる（大正四年四月作）

日だまり

宿なしの犬の親子と日だまりに親しみがたく
しましさびしむ

馴染かね親子の犬は去りてゆく心のこしつゝ
この日だまりを

去りてゆく親子の犬は日だまりの吾をかへり
見つゝ終にかへり來ず

陽だまりに椎葉のゆるゝしばらくはそれを眺
めて靜かなるかな

陽だまりに去りかねてゐる久しくて吾家しみ
じみ冷たく見ゆる

畫の床に眼をとぢて落付けどなほ鎚の音の忘
れかねつゝ（十月作）

長やから（其三）

米磨ぎつゝ垣根を覗く女あり菖蒲のめばへを
母と語らふ

働きにゆく人はゆきにはたづみ音もなう輝る
たまゆらあはれ

大正四年

嵐のあと

女學校の庭に咲きたる赤き花かいま見て來て
ひとりかなしも

ひつたりと嵐靜まり月高し夜仕事終へてほく
ほくと歸る

嵐のあと月の明るく一本の煙突のけむりふかく流るゝ

風邪心地に疲れて歸る夜をふかみ冷たき息を吸ひにけるかも

晝さがり窓の下邊に落ちつかぬ居眠りをする疲れたりけり

夕さりていまは苦しき手をつくね鎚をはなれ得る吾れならなくに（十二月作）

米吉の書簡

拜啓定めしお歸りの時間も遲れ申したることならんと案じ申して候。私ごとき爲に色々と御心配下さることゝくれぐれも嬉しう存じ候。さて本日金の入用有り云々と兄（米吉の實兄の事）に申し出たる處、どう有つても本月一ぱいは働いてくれよ、そのかはり小遣として五圓遣るとの言葉、理由をあかしかれたる爲に、しひてとは到底言ひ

がたく困り居る次第。時に又かくの如き事申し出られたるぎにてはこれなく、候へ共、來一日迄に旅費五圓程御心配願へまじくて候や。働きさへすれば二人にてかならずお返し申すべく、此段お心配切に願はしうて候。時に女事も行く迄働く心組にてありしかど、主人が彼女にとやかく親切つくしくれる爲、お神さんとの不和が有りて居がたしとて歸宅いたしたき由申し來り、誠に當わく（不明）候。「大正八年五月……高田浪吉宛」

夜

水ひきし濕めれる庭に鳴く蟲をきゝつゝさび
し人も訪ひ來ず

蛇の居る硝子の檻を恐ろしみ何か欲して近づ
きてゆくか

店頭のがらすの檻の夜の蛇頭ならべて動くと
もせず

貰ひ湯につゝましくして浸り居り冷たき風は
そよりと過ぎぬ（十月作）

舞子

秋もはや深くなりたる酒場の夜土間ふみなら
し舞子は舞ふも

いとけなき舞子入り來て唱ふ聲とぎれては寒
き今宵の酒場

あさましき吾と思へば人なかに醉ひて唱ひて
涙こぼるる

かり妻と並び枕はともしもよ相抱かるゝ命を
もちて（大正七年十一月作）

朝顔

競馬場の眞陽まつぴるま赤土路たつた一道心
は躍る

青々と芝原ひろし仰げども仰げども雲雀の鳴
方は知れず

櫻葉の蔭をそよりと風わたり堪へられなくて
此所にまろびぬ

一本の水わが胸にはじけ散り瀧口の龍の目玉
の光り

米代を握る夕邊のこの誇りやうやく淋しくな
らんとするも

ほのぼのと背戸の空地にこの朝も朝顔さきて
静かなるかな（九月作）

米吉の書簡

「まことに久しく筆もたざりし故おもしろし穂先は走る思はぬ方に」ほんとうに苦しい〳〵永い夜がやつと明けてうれしい。私藥、今日きりでなくなる。どうでもむりをおかして明朝はさいせい會へ行きたいと思ふ。書付もらつてもらへまいか。原庭警察でもくれるさうだが、朝の七時までだとの事、お願ついでに無理をお願する。昨日よ、君

が俺に自殺しろとしんけんにせまる夢を見た。死ねぬ〳〵と又言つた。どうかおゆるし下さい。（大正八年十一月三日……高田浪吉宛）

青芝

病む友と語りてこの夜更けにけり外の面の風
の遠くゆく音

しみじみと堪へざる疲れ病む友につひに訴へ
つさびしきものを

まじまじと灯あかるし働いて食はねばならぬ
二人なるかも

初夏の空に高々と飛行船を仰ぎけりしかすが
に工長は見ざりけるかも

板を抱へ大工が屋根に立てりけり初夏の光り
のかゞやけるかな

街の中に陸軍用地青々と芝一面に静けきものを

芝の上に吾れ飛び下りつぞつくりと朝露の中に吾れとび下りつ

ふか〳〵と青芝の露ふみて立てり工場は今日休みなりけり（七月作）

貧窮餘録

工場には仕事とぼしくおぼつかなほかに我が仕事ありと云はなくに

半月に得たる金のこのとぼしさや語るすべなき母と吾れかな

投け出せし金をつく〳〵と母見居り一間なる
家に夕日は赤く

極まりて借りたれば金のたふとけれあまりに
寂しき涙なるかも

日除にと粉袋かけて見たりけりあはれこの貧
しさにあくまでふさはし

みつしりと働らくべく職を求めしにはからず
も吾れに病ひありけり（四月作）

米吉の書簡

筆が持てなくなつてこまります。おそくなりましたが御
病氣なさうですね。たいへんこまりますね。もう〳〵病氣
程いやなものは御ざいません。はやくすこやかになつて
下さい。いつも〳〵御親切なおたより、うれしうございま
す。このごろではどなたからもだん〳〵たよりがなくな
つてしまひました。さびしうございます。友達の顔にも逢

はねば、誰でもいゝからしみ〴〵顔見合せて語りたいなあとつく〴〵思ひます病院の方、今迄色々皆様にも心配かけたけれど、もうのぞみなささうです。御心配かけてすみません一日もはやくおなほり下さい。（大正八年十一月十日……中村美穂宛）

大正三年

乏しき仕事

工場に仕事とぼしも吾が打つ小鎚の音は響きわたりぬ

隔日に鎚うちに來つゝ工場の眞中に坐して仕事はとぼし

しんかんとぼしき仕事抱へつゝ窓に飛びか
ふ淡雪を見る

月夜路をしんしんとして歩くなり頭がちなる
親のなき子と

草花の種をわが蒔くめんめんと日は降りそゝ
ぎ静かなるかも

やはらかき土のしめりに草花の種したしめり
春の日は照り

疲れたる父は酒汲みしみ〴〵と秘めおきし不
平言ひ盡きぬ夜ぞ（三月作）

林登美子氏へ

息あぐみ街には出づれ吾が目にししたしく見
ゆるものとてもなし

店頭の玻璃戸にうつる吾が姿うつゝぬかして
歩きて居れる

知る程の人ぞ戀しき街の中行方もなさにつか
れたりけり

九官鳥のなく聲さびし晝日中こがれて歩く吾
の心に（大正八年五月作）

眞鍮粉

宵暗き街の邊にうづくまりほろほろと麵麭（ぱん）を
食みにけるかも

うづくまり麵麭を食み居り夕闇の川いつぱい
に秋風吹くも

疲れたる兩手をつくね冷え冷えと秋の星夜を
吾が歸るなり

鑪（やすり）する吾が手の下に眞鍮粉は光りきらめき散
りたまりけり

胡坐して鑪する吾に朝日さし吾れ尊くて働く
今は

眞鍮の粉の沁み光る吾が指を日にかざし見つ
ひとりかなしく（十一月作）

深　　案

しみ〴〵と母の深案に餘りける虫さへ鳴かぬ
宵冷えにけり

歸りゆく街ごつぶりと母上にいまだ遙けくて
暮れはてにけり（大正四年作）

槌の柄

わが握る槌の柄減りて光りけり職工をやめん
といくたび思ひし

ながき夜業を笑ひ語りの一つも嬉しからねば
涙にじむも

ニッケルのにぶき光りに長き夜を瞼おもりて
手骨いたみきぬ

ふと詠みし歌をおづおづ記す間ぞ前の男の仕
事早かりし

屋根の陽にとつぷり臥しつひる休み顔の油の
焼くるをおぼゆ

仕事しつゝ今日もいろいろ考へたりされど日記に書くこともなしき

蒼き顔いづれも病みてあるごとし眠り足らぬ朝ことさら思ふ（十月作）

機械の音

仕事場にかはゆき小僧一人居りそを使ふまじと思ひけるかな

つくづと小僧の顔視つにつこりと笑ひてやればその夜うれしき

朝ごとを床の中に居て日をかぞふかなしきこ
との癖となりしぞ

指落して泣いて行きし友のうしろかげ機械の
音もただならぬかな

悄然と繃帶の手を胸におき友は病院より歸り
來にけり（四月作）

一年

吾れの身の吾がものならぬはかな日の一年と
はなりぬ日暮待ちし日の

日もすがら金鎚をうつそこ痛む頭を卷きて金
鎚を打つ

去年までこの工場に居し男日くるる窓外を笑ひて通れり

指落しゝ男またあり吾れ一人煙草休みに日を浴びて居り

泥道を囚人三人過ぎければ足跡踏みて子等のしれり（三月作）

歌會の歌

向き向きに行きの忙しき師走街別れをすると過ぎて來にけり（大正六年十二月十五日齋藤茂吉氏送別會）

母の靈いづべの家に守るべき軒べ〳〵にをがら火匂ふ（伊藤左千夫先生六週忌歌會）

我が母の靈を迎へむ新盆の問はれて寂し家のあらねば（伊藤左千夫先生六週忌歌會）

眞間の山みち梨賣る菅野の少女かこみ皮むかせつゝ我らはむなる（大正七年九月一日市川歌會）

都大路の石塀にたれて殘りたる日向葵を見れば實を結びたる（子規歌會）

腰すゑて酒を待つ間の今宵は殊に腰掛樽の尻に冷え來る（大正八年一月根津娯樂園アララギ歌會二首）

嫁をむかふと此の身にかゝる言はたえて今宵も酒に腹しみわたる

裏軒のかげに久しき殘り雪土をかむりて雨にとけ居り（長塚節氏忌清水谷皆香園歌會席上一首）

一間のうち梅雨けに冷えし眞夜のなか目をおしつぶれど忘らえぬ汝は　（六月十五日照太郎宅行路アララギ會）

青桐のこゝだ垂實はうるほはずまゝしき心吾は悔ゆらるる　（大正八年八月相坂宅行路例會席上一首）

米吉の書簡

夕陽はほんとうに沈みました。都の街のもの音も、星の光におのづから其の夜めいた音の色さいが聞きされます

こゝ二三日はほんとうにいゝ日和、今の体にお天氣が一番嬉しうございます。あの日はあんなに雨に降られて寒かつたのです。ほんとうにあなたと淺草へ行かなかたのが殘念で、今考へても。然しもう一ヶ月になります。まるで口の中からぶちあけるやうに血を吐いてからそれからは毎夜〳〵吐きました。ほんとうにこの眞紅の血潮を捨てるか、さう思うては苦しい息をつき乍ら夜分そうとぶ板の下へすてに行くのです。それでもあなたお承知の女、それが私が病んで以來一日をきぐらゐに家を抜け出して來ては血の仕末などしてくれます。あなた